

## サンフランシスコ周遊記 ヒッピーと音楽の街

経営学部  
古川 邦之

2007年12月、僕はAGU (American Geophysical Union) の Fall Meeting という学会に出席するためアメリカ合衆国西海岸に位置するサンフランシスコを訪れました。この学会は、地球及び宇宙に関する全分野の研究者が集まり、今回の学会参加者だけでも15,000人を越えるほどのマンモス学会です。会場で顔見知りの研究者に遭遇するだけでも奇跡に近いと言えるでしょう。僕は研究成果をポスターで紹介しました。写真1はその会場ですが、これでもほんの一部で全体はこれの10倍以上の広さです。何回も迷子になりました。

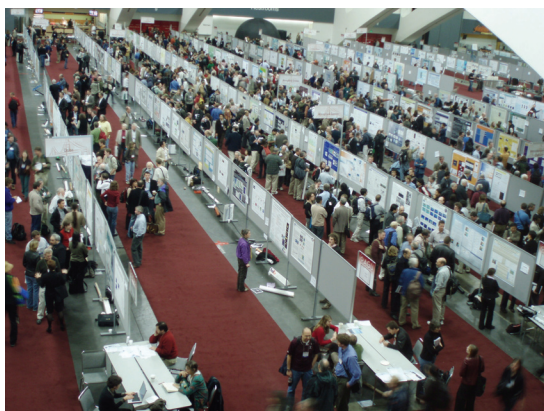


写真1 ポスター発表会場の一部

サンフランシスコは大阪市と姉妹都市で、空港内は竹が飾られており和風です。また急勾配の坂がとても多い街で、徒歩ではきついので昔からケーブルカー (写真2) が発達しています。テレビや雑誌などでも見かけるケーブルカーのステップ乗



写真2 ケーブルカー

車は観光客の憧れですが、真横を車が猛スピードで走り抜けるのでヒヤヒヤします。僕は調子にのってステップで写真を撮っていたら、危ないからやめろ！と運転手さんに叱られました。またサンフランシスコは、アメリカ合衆国におけるヒッピームーブメントの中心地としても有名です。ヒッピーとは、1960年代後半に生まれ、伝統や制度などの価値観を否定し自然回帰を目指す人々の総称です。1969年の映画イージーライダーやウッドストックと呼ばれる音楽祭は、その文化の代表と言えるでしょう。このような文化は、サンフランシスコの中でも、特にヘイトアシュベリーという地区が中心でした。ヘイトアシュベリーは現在でも多くのヒッピーが住んでおり一風変わった地区です。多くの壁には特徴的な絵 (写真3) が描いてありますが、これもヒッピー文化の象徴です。また街中で見かけたヒッピーは、布を体に巻き付けていた



写真3 ヒッピーの芸術作品

り、ぼろぼろのぬいぐるみを持っていたりと自由な雰囲気が漂っていました（写真4）。またヒッピーの連れていた犬には眉毛が描かれており、犬も自由そうでした。僕の心の師匠たちが集う場所でしたね。



写真4 現役のヒッピー

サンフランシスコは音楽の街としても有名です。ハイトアシュベリーの近くには、僕の尊敬するロックシンガーのジャニス・ジョブリンが住んでいた家もあり、そこで若くして亡くなった彼女に思いを馳せました（現在は他人の家なのでゆっくりできませんでしたが...）。また泊まったホテルは、トムソーヤの冒険の作者であるマークトゥウェインとジャズシンガーのピリーホリデイが出会った場所で、それを記念する絵画が飾られていました。僕はピリーホリデイが大好きで、やはりその絵画の前で何回もシャッターを切りました（写真5）。

夜ご飯を食べようと街を歩いていると、その種



写真5 マークトゥウェインとピリーホリデイ



写真6 七輪にのる餃子

類は多様で、おそらくどの国の料理でも食べることができます。ちなみに SUSHI BOAT という日本料理店のショーケースには、七輪の上に餃子がのったサンプルが置いてありました（写真6）。七輪で焼くと言ったらやっぱり餃子は外せませんよね。ここでも自由を感じることができましたね。まあ様々な料理があるわけですが、やはりアメリカなので、基本的にはステーキをメインとする料理が多いようでした。でかすぎでしたが（写真7）。また一度だけライブを楽しみながら食事を行いました。しかし実は、僕は食事目的ではなく、ライブを心から楽しみにしていました。そのライブは、僕の尊敬するブルースシンガーであるジョンリーフッカーの娘、ザキヤフッカーのステージだったからです。そして何とライブの合間には、ザキヤは客席に出てきてくれました。僕は、あなたの父親の大ファンで今夜からあなたの大ファン



写真7 巨大なTボーンステーキ



になった（少しお世辞も加えます）、ということを伝えと、とても喜んでくれて、父親であるジョンのCDブックレットにサインをしてくれました。さらにジョンの名曲“ Boom Boom ”をいっしょに唄ってくれた時には、爆発してしまいそうなくらい嬉しかったです。最後には、テーブルまで来て唄ってくれ、いっしょに写真を撮ってくれました（写真8）。



写真8 ザキヤフッカーと

このようにサンフランシスコは、僕の尊敬する人たちがいた場所であり、僕にとっては特別な場所と言えます。特にヘイトアシュベリー地区は心落ち着きます。この街は治安的にも悪くなく（もちろん悪い地区もある）、十分に気を付けてさえいれば怖い目に遭うことはほとんどないと思います。皆さんも自由を感じたくなった時には、ぜひサンフランシスコへ行ってください。

## 蝙蝠を食べる勇氣はありますか？

経営学部  
矢田 博士

### 一、はじめに

前号に引き続き蝙蝠の話をしてみたい。前号では、蝙蝠を主題とした中国古典詩歌においては、蝙蝠はおおむね嫌悪の対象として詠われていたこと、その一方で、今日の中国においては、蝙蝠の「蝠」が「福」と同じ音であることから、めでたい生き物とされていること、そして蝙蝠をめでたいものとする発想は、目下のところ明代の頃までさかのぼって確認することができ、陶器などの模様にもしばしば吉祥文として画かれること<sup>(1)</sup>などについて紹介した。

中国古典詩歌においては、おおむね嫌悪の対象とされていた蝙蝠ではあるが、前号でも紹介した白居易の「洞中蝙蝠」詩の冒頭の句にも、「千年鼠化白蝙蝠《千年を生きた鼠が白い蝙蝠に変化する》」と詠われているように、蝙蝠には「長寿の生き物」という側面もあった。今号では、その「長寿」という側面に焦点をあてて論じてみたい。

### 二、蝙蝠を食べると長寿が得られるのか

先の白居易の詩にも詠われているように、中国では古来、蝙蝠は長寿の生き物とされていたようである。例えば、『太平御覧』巻九一「獸部二三・鼠」に引く鄭氏の『玄中記』には、

百歳之鼠、化爲蝙蝠。

《百歳の鼠が、変化して蝙蝠となる。》